

# 良い「経済成長」と悪い「経済成長」

筆者は一昨年にキューバ、そして昨年はブータンという、いささか辺境に位置する国を訪問した。

そこで最も強烈に感じたのは、これらの国々が物質的には豊かではない（経済成長の恩恵にそれほど浴していない）のに、町で出会う人々の表情が明るいということだった。人なつこくて親切な人が多いのだ。人の隙をうかがって盗みを働こうという連中にもまずは出会わないし、そういう雰囲気は全くないのである。ひたすらに人なつこく、笑顔が絶えない。大事な点は、彼らが物質的には困窮していても、精神的には「荒んでいない」という点である。

他方、経済成長の恩恵に浴している経済大国といわれる多くの国々の大都会では凶悪犯罪が日常化し、場所によっては歩いているだけで危険を感じてしまう。キューバやブータンに比べてみると、物質的にはより高い水準の生活をしているのに、明らかに精神的に「荒んでいる」人達の割合が高いのである。一体この現象をどう理解すればよいのか。

もちろん、貧乏な国の人々がすべて明るいというわけではない。物乞いが群がってくる国、押しつけがましい物売りに悩まされる国、夜は怖くて出歩けない国など、こちらの方がむしろ普通である。都会の汚れた雰囲気や人々の絶望的な表情に出会うこともしばしばだ。一体、GDPの水準ではそれほど変わらないのに、キューバやブータンのような精神的に豊かさを感じさせられる国と精神的に荒んでいる国とでは、どこがどう違うのか。

なかなか難しい問題である。キューバはカストロ率いる社会主義の国であり、ブータンは依然として王政の国で、これまでは投票制度もなかった。前者は「マーケットを使わない国」、後者は「民主主義を実践していない国」である。それでも（それ故に？）国民の気持ちが荒んでいないのは、国民の間に「切り捨てられている」「搾取されている」という感覚が少ないからなのではないだろうか。市場原理や民主主義の「負の側面」が表面化していないからではないだろうか。

近代経済成長の成果の多くは「マーケットメカニズム」と「民主主義」の両輪を軸に実現されてきたわけだが、それが我々人間の精神に何をもたらしてきたのかは十分吟味されていない。もちろん、経済成長が人類にもたらした数多くの「恩恵」を忘れるわけにはいかないし、精神的に荒んだ状況が一部に存在するからといって経済成長そのものを否定するのは難しい。それにもかかわらず、経済成長が人間に何をもたらしてきたのかについて見極める作業はやはり必要である。結局、経済成長にも「良い」経済成長と「悪い」経済成長があるという事実を直視する必要があるのではないだろうか。

「良い」経済成長とは精神的豊かさ（その定義は難しいが）を損なわない経済成長であり、「悪い」経済成長とは人の精神を荒ませる経済成長である。キューバやブータンのように、国民の表情を荒ませることなく、精神的な健全性を維持しながら経済成長を実現することは可能なのか、可能だとすればどういふ経済政策、いかなる社会システムを採用すればよいのか？

これこそ今回の特集「経済成長を考える」を組んだ主要な問題意識であった。もちろん具体的な政策提言までの道のりはかなり険しい。上田晶子氏が紹介されているブータンのGNH（国民総幸福）を構成する諸要素について考えてみても、精神的な健全性や豊かさをどう定義し、計測するのかという問題に決定的な答えを出すことは決して容易なことではない。しかし、計測可能なものだけを分析するだけでは経済学の有用性も限られたものにとどまるだろう。我々は思いきってこの領域にも足を踏み入れる勇気を持つべきではないだろうか。

